

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 ウイメンズヘルス看護学分野	修了年度	平成 28 年度
氏名	瀧澤 正枝	指導教員 (主査)	水野 千奈津 (刀根 洋子)

論文題目	妊娠中の安静が母親役割獲得行動に与える影響
------	------------------------------

本文概要

【目的】

妊婦が安静を必要としたときの新生児への愛着、母親役割獲得行動への影響を明らかにする。また、被養育体験と内的作業モデルがそれらに及ぼす影響を明らかにする。

【方法】

関東圏内の産後 1 ヶ月健診を受ける褥婦を対象とし、「新生児への愛着尺度」「被養育体験尺度」「内的作業モデル尺度」「妊娠中の母親役割獲得行動」についての質問紙調査を行なった。分析は安静群と非安静群に分け比較検討した。

【結果】

調査用紙の配布数は 233 件で回収率は 68.6%であった。回答のあった妊婦は 160 名、有効回答数は 102 名 (64%) であった。対象者の割合は安静群が 28 名 (27.5%)、非安静群が 74 名 (72.5%) であった。初産婦で妊娠中の安静期間が 31 日を超えた場合に「新生児への愛着」得点が低く ($p=.007$)、また、母親役割獲得行動である「出産後の育児について想像をする」が有意に低い ($p=.046$) 結果であった。同群の内的作業モデルのタイプは安定型が 75%を占めていた。

【考察】

初産婦で安静期間が 31 日以上であった場合、「新生児への愛着」が低かった。妊娠中の長期化する安静が、出産後における愛着形成過程に影響することが考えられる。内的作業モデルのタイプが安定型であった場合も、「出産後のイメージを想像する」が低い結果であった。このことは、無事に出産することに意識が向き、赤ちゃんのいる生活に思いを馳せることができなかつたためと考える。先行研究では、妊娠中に母親としての具体的で現実的な空想が児への愛着を高めるといわれている。以上のことから、母親役割を獲得するために、妊娠中から出産後を具体的にイメージできるよう支援することが重要であると考える。

【結論】

- 1) 妊娠中に安静期間が 31 日以上あった初産婦は、新生児への愛着得点が低かつた。
- 2) 妊娠中の安静の長期化が、「出産後のイメージを想像する」ことを減少させ、愛着形成過程に影響することが示唆された。
- 3) 内的作業モデルが安定型である褥婦であっても、安静期間が長期化することにより、児への愛着が低くなる可能性があることが示唆された。

キーワード：妊娠中の安静、母親役割獲得行動、新生児への愛着、内的作業モデル、被養育経験